

研究目的

野球の投球動作で、ボールを低めに投げるにはストライドを広くするという考えと、狭くするという考えがある。そこでどちらが有効な投球動作かを明らかにしようとした。

研究方法

投球熟練者と未熟練者に2つの投法でアウトコースとインコースの低めに投げさせた。

研究結果

ボールスピードの少ない未熟練者は、ストライドを広くすると低めにコントロールしやすく、ボールのスピードを上げるにはストライドを狭くすればよいことが分かった。

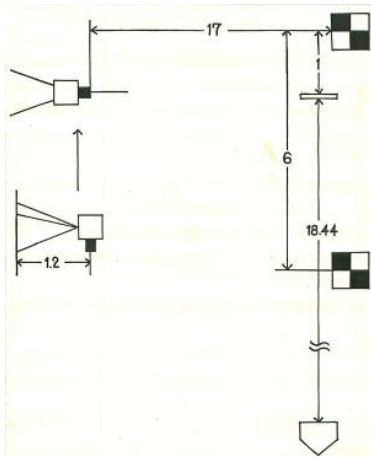


表4 B投手のボールスピード

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
長い	111	110	108	109	107	110	108	110	109	111	107	
短い	109	109	110	111	109	107	109	108	110	108	107	107
	13	14	15	16	17	18	19	20	X	SD		
	109	107	106	105	108	105	109	108	108.35	1.75		
	107	108	109	110	110	109	108	109	108.7	11.4		

表5 B投手のHigh・Ball時のボールスピード

回	1	2
長い	111	111

回	1	3	4	5	7	10	15	16	18	20	X	SD
短い	109	110	111	109	109	108	109	110	109	109	109.5	0.78

表15 A投手のストライド(長,短)のコントロール(正確性)

1 長

	1	2	6	
OUT	1	3	3	IN
	2	0	2	

2 短

	1	1	2	
OUT	0	2	2	IN
	4	5	3	

ピッチングフォームにおける熟練者と未熟練者の違い

研究目的

野球のピッチングにおいて熟練者と未熟練者の違いを明らかにし、指導のポイントを明らかにしようとした。

研究方法

ピッチング動作をVolexカメラで撮影し、フィルム解析装置で身体関節部位の変化を記録した。そして、運動の再現性を手首の軌跡から評価しようとした。

研究結果

手首の軌跡から、熟練者は軌跡がスムーズでほぼ同じ場所を通過するのに対し、未熟練者の軌跡は投球ごとに軌跡が異なり、スムーズであった。

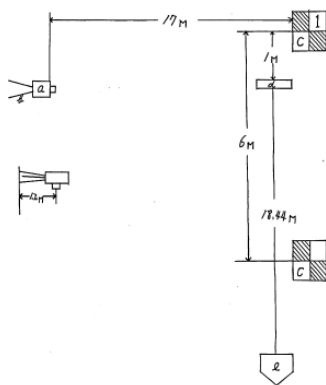


図-1 実験装置配置図

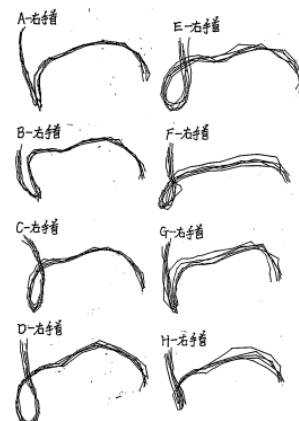


図-4 熟練者と未熟練者の右手首の軌跡

ハンドボール競技における攻撃指導に関する一考察

広瀬 尊彦

研究目的

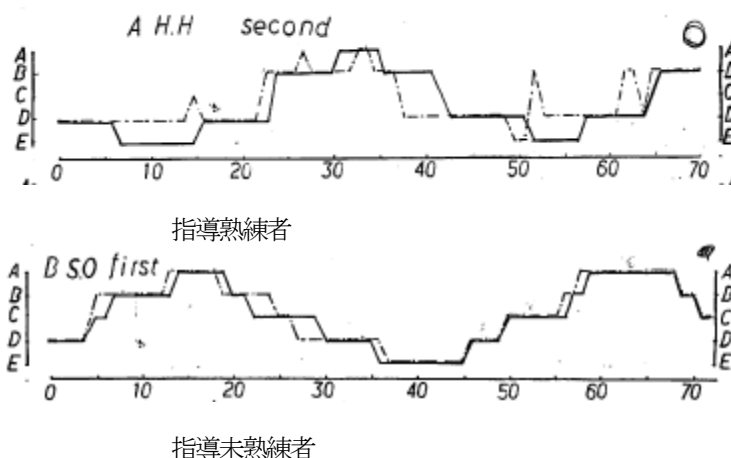
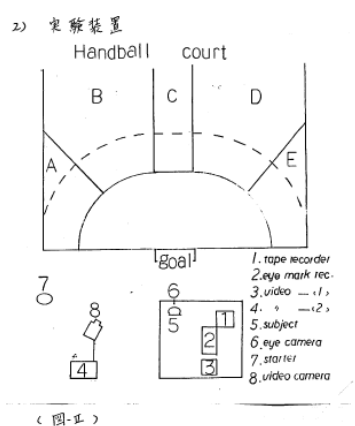
ハンドボールの指導者は、攻撃場面でどのような視点でプレーを観察しているかについて、明らかにしようとした。

研究方法

指導の熟練者と未熟練者に会いマークカメラを装着させ、攻撃場面に着目して攻防場面を見させた。被験者には1回の攻防ごとに所見をのべさせ音声を記録した。コートをも5分割した中を、アイマークとボールがどのように移動するかを記録した。

研究結果

アイマークの移動状況から、熟練指導者はボールの展開を先読みしたかのように、ボールがコートを移動する先に着目していた。またボールが展開される途中で、ボールの位置とは全く異なる地域にも着目していた。一方指導未熟練者は、アイマークがボールの移動を追跡するように動いていた。



ハンドボール競技における防御指導に関する一考察

川口 武史

研究目的

ハンドボールの指導者は、防禦場面でどのような点に着目して情報収集しているかについて明らかにしようとした。

研究方法

被験者はアイマークレコーダを装着し、コートの後方高い位置から攻防を観察した。被験者には防禦に着目するように指示した。そして、コートをも5分割した中を、アイマークとボールがどのように移動するかを記録した。

研究結果

指導未熟練者はボールの近辺に着目(アイマーク)するのにに対し、熟練指導者はボールの移動位置とは全く異なる場所にもアイマークが移動していた。

(図-1) 被験者の位置

